

新潮社

大岡昇平

事件





事件

大岡昇平

新潮社版



事件

昭和五十二年九月十五日 発行
昭和五十四年六月十五日 三十一刷

著者 大岡昇平

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一

電話 業務(03)二六六―五一

編集(03)二六六―五四
振替 東京 四一八〇八

定価 二二〇四

印刷 大日本印刷株式会社・製本 新宿加藤製本株式会社
©Shohei Ooka 1977, Printed in Japan
乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

長編小説
事

件
目次

午後の法廷	132
休憩時間	125
尋問	99
証人	92
被害者	81
弁護士	69
証拠調	53
冒頭陳述	45
公判	31
判事補	17
事件	7

あ と が き	301
真 実	293
判 決	288
合 議	276
最 終 弁 論	266
論 告	262
本 人 質 問	251
実 地 検 証	242
新 事 実	214
新 生 活	196
間 奏 曲	184
殺 意	159

事件

事 件

昭和三十六年六月二十八日のことだった。むし暑い梅雨ばれの一日はようやく終りに近づいたが、暑気がまだ空中に残っている五時頃、その山裾の細い道を、上田宏が自転車を押して下りて来た時から、この物語は始まる。

神奈川県高座郡金田町は、人口五千人に足りない、小さな田舎町である。電話を持つ家は百軒もない。

一帯の相模川の流域には、砂利を運ぶ運賃を節約するためばかりではあるまいが、工場がやたらにふえて来た。昭和四十年年度には、金田町の区域だけでも、二十の工場が完成のはずで、そこからあがる税金収入に見合って、田と畑と丘ばかりのこのあたりの村や部落が、一つの町にまとまった。

工場の製品は鋳物や陶器からトランジスター、計器、現代日本の繁栄を象徴する硝子など、あらゆる分野にわたっていた。付近一帯の農家で飼われる豚をお目当てに、罐詰工場を建てる計画もあった。鮭や鱒の罐詰専門の北洋漁業

の、敵前上陸と業界紙でさわがれ、工員を確保するため一年前から、付近の農家の百五十人の若者が、一時金をもらっていた。

今年十九歳の上田宏も、その一人にはいつていた。だから彼がその山裾の道を下りて来た日の翌日、不意に町を出て行こうなんて、誰も考え及ばぬことだった。

その日その道で宏に会ったのは、町の雑貨商の主人、大村のじいさんだった。宏は顔色が悪かったそうである。

「どこ行きかよ」

じいさんはすれ違いざまに声をかけた。

「長後へ用足しに行つて来たんです」

サラシ沢と呼ばれ、段をなして丘へ喰い込んでいる田圃に沿って、その道はそれから東へ五キロ、目下ゴルフ場を建設中の丘の起伏を越えて、小田急江ノ島線に出る近道だった。

金田町の人達は大抵の用や買物は、厚木ですませてしまふので、宏がわざわざ山を越えて、長後へ行つたと聞いて、少し変な気がした——と、これも大村のじいさんがあとになって言い出したことだった。

しかし宏はうそをついたわけではなかった。彼がその日、長後へ行つたのは事実であった。

ただ彼がそこでどんな用を足したか、その山裾の道の南へ広がった大村のじいさんの持ち山の杉林の中にある、坂

井ハツ子の死体に、自分が関係があることだけ、言わなかったにすぎない。

「ズボンにも、シャツにも血はついていませんでした。あいつがそんな大それたことをしていたとは、知りませんでした」

と、大村のじいさんは、駐在所の天野巡査に言った。

父親の喜平その他家の者も、その日、帰ってからの宏の態度に、なんの異常も認めなかった。次の日の夜、いっしょに町を出、五日の間、宏と横浜の磯子のアパートでいっしょに住んだ坂井ヨシ子も、気がつかなかった。

ヨシ子は殺されたハツ子の妹だ。

土地の故老の伝えるところによると、金田町は昔から事件のない土地だった。長い徳川の治世は天領つまり幕府の直轄領で、年貢の取り立てもあまりきびしくなく、いわば可愛がられた土地だった。明治の自由党時代には、反乱が多発した三多摩地方に繰り込まれてはいるが、それも実は村の物持ちの一軒が、資金調達が目的の強盗の被害を受けたというだけのことだった。そしてこれが村の人達が記憶している、唯一の大事件だった。

戦後の農地改革の行われる前から、五反から一町二、三反の自作農ばかりであった。派手なこともないかわりに、あまり悲惨な語り草もないのが、金田町の特徴だった。

村の様子がかわり始めたのは、終戦後五キロ北の厚木、座間が進駐軍の基地になってからである。多くの村の若者達が、設営や清掃に狩り出されて行った。主に復員者から成り立っていたそれらの労務者は、アメリカ軍が、あまりしばしば兵舎や病院の周辺の模様替えをするのに、驚いていた。

その後駐日米軍の縮小によって、労務者の大量が放出されてからしばらく、この辺から相模原へかけて、追剣や婦女暴行事件が絶えなかったが、しかしそれらの人員はやがて相模川流域に建ち始めた工場や砂利採掘場に吸収されて行った。

金田町の若者達は、もはや農民とは言えなかった。田圃は親父の代までで終りだ、なんていう者も珍しくなかった。酒は祭りや「野上り」の時だけ飲むものではなく、一年中町の飲屋で飲むものになった。

工場が建ちだしてから、地価は坪一万から一万二千元もするようになった。多くの農家が、二、三百万の預金を持つ身の上になった。耕作は機械化され、若い労働力を必要としなくなった。例えば坂井ハツ子の母の後家のすみ江は、農繁期だけ、少しの人手を雇うだけで、売り残しの三反の田を、充分やって行くことが出来た。

姉娘のハツ子が百姓をいやがり、六年前、東京へ出て行った時、すみ江がそれほどなかったのも、そのせい

かも知れない。新宿の割烹料理店に女中として住み込んだということだったが、パンバンになったんだと言う人もいた。たまに町へ帰った時など、パーマネットをかけ、濃いルージュを引いた恰好が、付近の人の目を惹いた。女中にしては派手すぎると、言う者が多かった。

しかしほんとを言えば、ハツ子の恰好は、町のほかの娘に比べて、特に派手というほどのことはなかったのである。町の娘だって、近頃はみんな厚木の町的美容院へ、パーマネットをかけに行くからである。彼女が派手だといわれるのは、そういう娘たちの多くが大抵、職場にいる昼日中、通りをぶらぶらしたり、喫茶店へ入って、タバコをふかしていたりするからにすぎない。

一年前から、ハツ子は町に帰って来ていた。給料をためたという三十万の金で、厚木の駅前の横丁に、一間間口の小屋がけみたいないな飲屋を出した。店は工場の工員や運転手や小田急の従業員などが相手で、結構はやった。母親のすみ江はむろん反対したが、店が一応成功したので、なにも言えなくなってしまった。

しばらくは家から通っていたが、店の備品や酒が盗られるといけなひと言って、月の大半は店に泊るようになった。町の人達は、なんのために泊るのか、わかったものではないと言った。

妹のヨシ子はハツ子より四つ年下の十九で、上田宏と同

じ年だった。器量はハツ子の方が上だということになっているが、宏はそうは思っていない。

ハト胸、出っ尻は、昔は母親のなげきであつたが、当節はグラマーと呼ばれるのに欠くことの出来ない資格になっている。ハツ子が男に好かれるのはそのためだ、と宏は思っている。妹のヨシ子は、丈も低く、すんなりとした体つきで、押し出しはよくないが、手足が引きしまつて、ぴちぴちとはねそうな感じだ。「若鮎のように」という形容は、相模川の流域に育ったヨシ子のためにあるのだ、と宏はひそかに思っていた。

二人は町の小学校の同じ教室で机を並べていたが、特に仲が好いというわけではなかった。一昨年の夏、平塚の七夕祭りの人混みの中でばったり会ってから、急に口をきくようになったのである。

裏通りの喫茶店にはいり、一時間ばかり喋って、出て来るところを、金田町の人に見られていた。そのころ宏は茅ヶ崎の自転車組立工場へ勤めながら、定時制の高等学校へ通っていた。今年卒業したところである。

宏はどうやらヨシ子と夫婦になるつもりらしい。しかし、父親の喜平が後家のすみ江の家から、殊にハツ子のような姉がいる家から嫁を取る気にならないだろう、と言われている。

母親のすみ江が、ハツ子に愛想をつかし、ヨシ子に望み

をかけているのも、明らかなことだった。ヨシ子に婿養子を取って、老後を見てもらうつもりでいる。そして喜平が総領の宏をはずすはずはないのだから、この話はますます実現の可能性が薄いのだった。

ヨシ子はそのうち茅ヶ崎の洋品店の売子になって、二人はよく同じバスで出勤した。夜おそく、いっしょに帰って来ることもあった。

「あれはもう出来ている」

というのが、一般の評判だった。いくら親が反対しても、若い二人は承知しないだろうと言う人もあった。ラジオやテレビの影響で、好いた同士がいっしょになるのは、当人の勝手だという思想は、金田町にもはいつて来ていた。

宏の父親の喜平は今年四十五だが、三年前に妻のおみやに先立たれたところだった。前から厚木にかこつてあった妾を後添いに入れる気になるかどうか、町の人達の関心の的だった。家には二人の弟妹がいた。喜平の姉の出戻りのおさきが、家の中を取りしきっていたが、どうもうまく行っていない、という評判だった。おみやさえ生きていれば、宏もあんなこととはしなかっただろう、といわれている。六月二十八日の夕方、宏が自転車を押して、山際の道を降りて来た次の日、二人が駆落したことにについて、

「到頭やったか」という者もいた。

二十八日は宵から雨になった。かなりひどい降り、風

もあったが、次の日の朝にはあがっていた。

ヨシ子が二、三日前から、なんとなく、そこいらを片付けていたのは、あとになって思い当ることだった。二十九日、珍しくすみ江の野良仕事を手伝った。風呂に入り、九時に寝床に入った。どれくらいだったか、すみ江は夢うつに、外にオート三輪車が止り、やがてスタートする音を聞いた。

「お母さん、あたしは宏さんといっしょに横浜へ行きます」と机の上におき手紙があった。「かつこうがついたら、ゆっくり話しに来るわ。なぜだまって行かなければならないのか、わけはいまはきかないで下さい」

宏もむろんだまって家を出ていた。二人が不意に村を出たことは、三日後、その杉林の中で、ハツ子の死体が見つかってから、意味を持ってきた。

それは金田町はじまって以来の大事件だった。

厚木駅前ハツ子の店が、二十八日から表戸を閉めたままなのは、次の日すみ江の耳にはいったが、あまり気にもとめなかった。

客と小田急で停留所三つ西の鶴巻温泉へ行くこともあれば東京へ出て、四、五日友達の家を泊り歩いて来ることがよくあったからだ。

ハツ子の死体が発見されたのは、七月二日、大村のじい

さんが、その持山の杉の木を、見て回ろうという氣を起したからにはかならない。

新しく建つ工場の、足場用の杉材の注文が、厚木の木材会社から来たので、じいさんは山の木を見に行ったのである。

彼は後で大和署の係官に供述している。

「家を出たのは七月二日の午後三時頃でした。木材会社の注文は二十石でしたが、それだけの量をいま伐ってもいいか、どの辺の木を伐るか、見つめておこうと思って、出掛けました。」

サラシ沢を少し登り、右手の林へは行って行きました。

林はそこから南に二百メートル、斜面に続いているんです。勝手は知っておりまうから、道のない林の中に踏み込んで、巻尺で幹の太さをはかったり、木の高さを調べたりしながら、だんだん奥へは行って行ったら、その窪地にハツ子が倒れていたのです。

はい、二度と見られた姿ではありませんでした。すっかり腐敗して、むろんハツ子とわかるはずはありません。そこはサラシ沢から五十メートルばかりは行ったところで、十メートルばかりの崖のすぐ下です。

いいえ、前は乱れていませんでした。崖の上にはせまい道が通っています。どさっと落ちて、そのままになったという風に、うつぶせになって、死んでいたのです。

とにかく警察に知らせなきゃと思い、木を見るのはそこまでにして、すぐ町の駐在所へ行つたのです。いいえ、さわたりしません。死んでいるのは、たしかだったんです。サンダルの方が脱げ、ハンドバッグがそばに落ちていました。ハツ子だということはあとで聞いたことですし、胸を刺されていることなんか、気がつきませんでした」

ハツ子は飲屋の女だから、痴情関係が捜査官の第一感だった。店の常連が次々に警察に呼ばれたが、みなハツ子の殺されたと推定される二十八日午後には、アリバイがあった。

そのうち、大村のじいさんは、二十八日の夕方、自転車を押してサラシ沢を降りて来る宏に会ったことを、思い出したのである。

ヨシ子は駆落ちする、ハツ子は殺されるで、すみ江は半狂乱になっていた。事件はむろん三日の新聞に出たから、その日のうちにヨシ子は、帰って来た。宏は磯子区のある自動車工場に一日から勤め出したばかりで、欠勤するわけにいかないとかで、帰らなかつた。そりゃちょっと工合が悪からう、勤めが忙しいは口実だ、というのが、町の人達の意見だったが、その日のうちに宏は逮捕されてしまったので、こんどはやっぱり気が替めたのだ、自分で殺した女の葬式にのこのこ出られるはずはないからな、ということになった。

二人が駆落ちしたことは、上田の家でも、坂井の家でも、内緒にしていたのだが、むろん町の人にはみな知っていた。

宏が軽三輪の助手席に、ヨシ子を乗せて、二十九日の夜十時すぎ、長後の方へ行ったのを、通行人に見られていた。

「このごろの若い者は仕様がな。宏をそそのかしてくれてありがとう」

と、喜平は、次の日、ヨシ子のおき手紙を見せに來たすみ江に言った。

行先が横浜なのはわかっていたが、搜索願いを出して恥をおおっぴらにすることはない、そのうちに食いつめて帰って来るだろうと、喜平は内心たかをくくっていた。

ハツ子が死んだおかげで、二人の居場所は、四日でわかったことになったのである。宏はヨシ子と二人で、磯子区の勤め先の近くのアパートに住んでいた。

「駆落ちしないでも、なんとか話し合う法はあったはずじゃないか」

と、すみ江は帰って來たヨシ子に言った。

「ハツ子は死んでしまったし、お前ひとり頼りなんだから、このままうちにておくれ。横浜へ行くとは、もう言

わんと、言っておくれ」

すみ江は涙を流してかきくどいたのだが、ヨシ子は下を向いたまま、返事をしなかった。

(こんな子じゃなかったのに)

このごろの若い者の氣持はわからない、とすみ江は悲しく思ったが、やがて彼女はもつとひどいことを、いろいろ知らなければならなかった。

ハツ子は乱暴されていなかったし、ハンドバッグの中には三千円以上の金がそのままだったから、なぜハツ子が殺されたかは、しばらくの間は、謎だった。

彼女が崖の上で刺され、それから杉林の中へ落ち込んだのは、明らかだった。その丘の上は一面に畑になっていて、麦を取り入れたあとは、ニンジンとゴボウが作ってあった。その畑の西側、つまりサラシ沢を登り切ったところで、その道と十字に交わる細い道が、丘の西の縁を南北に通っていた。

十字路から五十メートルばかり南へ寄ったところが、ハツ子の死体のあったところの上になる。その後、とぎれとぎれながら、よく降った梅雨の雨に洗われていたが、よく見ると道ばたの草の根っこに血痕が残っていたし、ハツ子の白いバラソルが、崖の途中に引っかかっていた。

警察はまずハツ子の二十八日の行動を調べた。厚木の彼女の店の付近の聞き込みによって、彼女がその日の午後二時すぎ、駅前から横浜行きのバスへ乗ったことが、確認された。

花模様のワンピースにサンダル、白のバラソル——現場

で死体となって発見されたままの服装だった。

二十三の娘として、別にかわった身なりではなかったが、そのバスに乗っていた女車掌は、やはり同じ年ごろの娘だったせいか、ハツ子をおぼえていた。彼女は小田急の長後の駅前で降りていた。連れは最初からなかったという。

ハツ子がそれからどうしたか、なんのため長後へ行ったかが、次の疑問であったが、それは駅できくとすぐわかった。最近厚木からこの駅へ配属がえになったばかりの、若い駅員を訪ねていたのである。少しばかりの売掛金を取りに来たのだった。

榊原というその駅員は、八百五十円の金を、その場で払った。ハツ子は元気で、別に心に悩みがあるような気配はなかった。彼女は長後でもう一軒回ってから、金田町へ帰ると言った。金田町にも掛金を取る先があるような口振りだったという。

要するに、この日ハツ子が月末の集金に回っていたことは明らかだった。するとこの日長後でもう一人、彼女に会った人間がいなければならぬわけだが、名乗り出る者はだれもなく、捜査はここでつまづいたかに見えた。

しかし土地の警察の協力の下に聞き込みを続けているうちに、大和署の刑事は決定的な足取りをつかんだ。

町内の丸秀運送店の息子は、茅ヶ崎の自転車組立工場、去年まで宏といっしょに働いていた仲だった。彼は事件の

一週間ばかり前、宏から、オート三輪車を借りたいという申込みを受けていた。

息子は父親がトラック二台とオート三輪車一台を買って運送屋をはじめたのを機会に、工場をやめて、店の手伝いをしていたのだった。

丸秀の主人は息子の付き合いに、商売道具を貸すのは、あまり気がすまなかったが、宏は前からよく家へ遊びに来たし、気心が知れていたので、大体承知する腹をきめていた。

二十八日の午後三時ごろ、宏は次の日の夜、車を取りに来る、という最終的取りきめのために来たのだった。

商売にさわらないように、夜から翌日の朝へかけて貸してほしいと、宏は言ったそうである。そして実際車は三十日の早朝、丸秀運送店に返されている。

宏と丸秀の息子が、店の前の三輪車のそばで、車を点検しているところへ、日傘をさしたハツ子を通りかかったのである。

「宏さん、こんなところで、何をしているの」

と、彼女はきいた。あとで考えると、宏ははっとした様子だったと、丸秀の息子は言っている。

事件の次の日、宏が町を去っている、ということは、すでに警察の注意を惹いていた。その上に、ハツ子の死の二時間前に、長後で会っていたのだ。

丸秀の息子の証言によれば、ハツ子はさらに言ったそうである。

「宏さん、町へ帰るんなら、連れてってくれない？」

話は大体すんでいた。宏はしぶしぶ——と丸秀の息子には見えた——ハツ子を自転車のうしろに乗せて、金田町の方角へ去ったという。これが四時近くだった。

宏が時々ハツ子の厚木の店へ来ていたことがわかって来た。酒は飲まなかったが、ジュースのビンを前において「みよし」（これがハツ子の店の名だ）のスタンドの奥の方に坐っていることが、よくあったという。

「姉妹二人をあやつっているとは、そうとうなものだ。妹と逃げるために、姉の方を殺したんだ」

三日の夕方、宏が横浜の勤務先から、大和署員に連行されたとき聞いた時、金田町の人達は、そう言った。

宏とヨシ子の間には、一つの秘密があったことも、わかって来た。そして、それが駆落ちした理由です、と宏は警察の係官に言った。ヨシ子は妊娠三カ月だった。

母親のすみ江は、事件後ヨシ子が家に帰ってから、やっとなに気がつくくらいに呑気者だったが、世間を知っていたハツ子は、金田町の家へはたまに帰るだけなのに、ずっと前から知っていた、と言う。

宏の供述によれば、ハツ子はすぐ中絶をすすめた。東京に知っている医者があるから、紹介してやると言った。

「そんな若いのに、子供を持ってどうするの。若いうちは楽しまなくっちゃ。およし、およし」

しかしヨシ子がどうしても子供を生むと言い張ったのである。人の物笑いになるなら、二人で横浜へも行ってみただけだ、と言い切った。

その二十八日の四時ごろ、宏の自転車で金田町へ向う途中も、ハツ子はまた中絶をすすめた。あのオート三輪車を借りる相談をしてたんじゃない、いよいよ駆落ちを実行する気、と言った。

あたしはそんな無謀な計画をだまって見ているわけに行かない。すぐかあさんに言いつける、と言ったという。

サラシ沢の上まで来た時、宏は町にはいるまえに、話をつけておかなくてはならないと思ったという。ハツ子を自転車から降ろし、崖上の道を杉林の上の方まで行った。

彼は引越しや新しい住居の設営のために、その日の午後、長後の町で、ナイフを買っていた。罐切りや栓抜きも引き出せる登山ナイフだった。

すみ江には言わないでくれ、見のがしてくれ、と頼んだが、ハツ子は笑って、

「あんたの家へも一度話に行かなくちゃ、と思っていたんだわ。冗談じゃないのよ。あんたたちまだ子供よ。子供が子供を生んでどうするの。だまって見ちゃいられないわ」と言った、という。それはそれまでにも、なんども言わ